

へいそくおけえ

■曾於の伝説・民話 其ノ二十五

「岩川飛行場跡」



「芙蓉之塔」

「芙蓉之塔」が語りかけるものは国家・国民の^{いやさか}弥栄であろう。

大隅町月野の八合原は、平坦なシラス台地である。現在には家畜関係の施設などがあり、周辺は市街地が広がる平和な地である。

ここは、六十数年前の太平洋戦争終結直前に、海軍岩川飛行場が急造され、昭和二十年五月から夜戦飛行隊「芙蓉部隊」(ふようぶたい)が発着した舞台であった。

岩川基地から出撃して帰らぬ隊員が八十余名にも達し、毎年その隊員達の慰霊祭が十一月十一日に、「芙蓉之塔」の下で執り行われる。

未曾有の戦争被害(とりわけ原爆や特攻・玉砕など)は、戦

後の日本を平和主義や国際協調主義に至らせたが、今でも『あの戦争は何だったのか』(保坂正康)と問い直させている。また、東京裁判(極東国際軍事裁判)は「勝者の裁き」であるとか、「文明の裁き」であるとか議論が続く。さらに、靖国神社とA級戦犯合祀が国際問題化している。

そうした論議は、現実の戦争遺跡と犠牲者の存在を抜きにしては語れない。岩川飛行場付近には、当時のシラス壕やセメント製地下壕の一部が現在も残っており、貴重な戦争史料である。

岩川飛行場を基地とした「芙蓉部隊」とは、どんな軍隊だったのか。岩川に居住する元搭乗員池田秀一さんに当時の様子を聞いた。

芙蓉部隊の指揮官美濃部正少佐は、戦況が不利になりつつある昭和十九年に、特攻作戦が主流となる中、これに異議(反対ではない)を称え、夜襲部隊の編成を主張したという。人命や機材を大切にし、かつ効果が上がる方策と考えた。連合艦隊作戦会議において、居並ぶ上官たちの末席で、統帥が厳しい中で

の勇気を奮った進言は、長官に採用され、その後芙蓉部隊はその任務を遂行したという。

また、岩川飛行場は徹底的に偽装され、昼間は牛が放たれ、農地に見せかけた。その為に、一回の爆撃も受けず、周辺の被害もほとんどなかったのは幸運であった。

それにしても、太平洋戦争は何故起きたのか。エール大学教授朝河貫一は、日露戦争後に『日本の禍機』(一九〇八年)を著し、将来日米衝突が起きたら、国家と人類進歩に重大な支障を来すと警鐘を鳴らしていた。

しかしながら、現実には太平洋戦争でアメリカを主とする連合国と戦い、敗戦の憂き目を見た。

戦争遺跡は他に、松山の積部隊や財部の鋒部隊も知られている。また、末吉高校敷地から鉄兜が大量に出土した。市内戦跡に故大社義教氏(日本ハム株)や鳥井道夫氏(サントリー株)も縁があるとは驚きである。

「芙蓉之塔」の前に佇むと、戦争の現実にはぼう然とし、慰霊の念を抱く。